

# カンピ・フレーグレイの海

加藤 芳子

## (1) シェリーとバーイア

「冬来たりなば、春遠からじ」——これは、19世紀初頭のイギリスのロマン派詩人パーシー・ビッシュ・シェリーPercy Bysshe Shelley (1792-1822) の代表作「西風に寄せるオード」(‘Ode to the West Wind’) という詩の最終行である。

この詩は、予言者としての詩人の思いを秋の枯葉にたとえ、「西風」というヨーロッパ独特の秋の暴風に託して、全世界に伝えようとした名作なのであるが、この詩の中に、「バイアエ」Baiae (現在のバーイア) という地名が登場しており、その海底には、古代の遺跡が沈んでいるというのである。

「バーイア」とは、一体どこにあるのか。どんな所なのか。何故シェリーは、この詩に登場させることになったのか。こういう事実関係が、これまでの英文学研究の領域で、検証しようと試みられたこともなかったとすれば、実に片手落ちであると思うに至った筆者は、早速フィールド・ワークに取りかかった。本論は、その長年の検証の報告の一部である。

## (2) バーイアの位置

「バーイア」は、イタリアのナポリ湾西部の港町であった。ナポリは、ローマから南へ約200キロの所にある。青く澄んだ美しいナポリ湾には、西端から東へ順に、クーマ、ポツオーリ、バーイア、ナポリ、ヘルクラネウム(現

在のエルコラーノ)、ポンペイ、スタビアエと、古代ギリシアの植民地だった町が、今日でもぐるっとその海岸線に並んでいる。特に、ポツオーリからバーイア近辺の一帯は、カンピ・フレーグレイと呼ばれ、ナーポリ一帯は大きくはカンパーニアという地方に属する。

「フレーグレイ」という名前は、そもそも、古代ギリシアの船乗り達がこのあたり一帯の多数の活発な火山活動を見て、「燃えている」(“phlegraios”)と呼んだ、ギリシア語に由来しているそうである。この火山活動のお陰で、この辺りには古来から、プリニウスも記しているように、ポツオーリ、バーイア、クーマ、ミセーノ、ルークリーノなど、鉱泉が湧き出ている所が多い。

カンピ・フレーグレイには、古来から色々な詩人達はその作品の中に描いてきている、ソルファターラという休火山がある。例えば、古代ローマ帝国の時代のストラボネ Strabone (B.C.66-24 A.D.) は、その著『地誌学』の中で、この火山のことを、“Forum Vulcani”、つまりヴルカーノ神に通じる入口であると記しているし、16世紀のG.C.カピッチオは、その著『ポツオーリの古代の真実』(La Vera Antichità di Pozzuoli)の中で、このソルファターラ火山は、地獄へ通じる穴であると記している。これは、このあたりの火山の地下からガスや蒸気が噴出する時の岩を砕く音が、まるで地獄の音のように聞こえたせいらしい。

ここには古来から沢山のクレーターがあり、有毒ガスを噴き出す所もあるし、温泉も沢山ある。一番最近の噴火は、1538年11月29日夕刻に始まった、モンテ・ヌオーヴォ山のものである。古来からのソルファターラその他の火山活動の結果、バーイア近辺の地形は大きく変わり、かつて海から丘の上まで階段状にずっと続いていた大規模な遺跡は、シェリーが訪れた19世紀の初めには、そのかなりの部分が海に埋没していたのである。シェリーは「西風に寄せるオード」の詩の中で、この海底遺跡の様子を次のように描いている。

Thou who didst waken from his summer dreams  
The blue Mediterranean, where he lay,

カンピ・フレーグレイの海 (加藤芳子)

Lulled by the coil of his crystalline streams,

Beside a pumice isle in Baiae's bay,  
And saw in sleep old palaces and towers  
Quivering within the wave's intenser day,

All overgrown with azure moss and flowers  
So sweet, the sense faints picturing them! Thou  
For whose path the Atlantic's level powers

Cleave themselves into chasms, while far below  
The sea-blooms and the oozy woods which wear  
The sapless foliage of the ocean, know

Thy voice, and suddenly grow gray with fear,  
And tremble and despoil themselves: oh, hear!

11. 29-42

シェリーの詩に出てくる「バーイア」は、カンピ・フレーグレイにあった古代ギリシアの植民地の一つであるが、これはローマ時代のみならず20世紀の今日もなお存在する町である。バーイアについて語るには、まず、カンピ・フレーグレイの歴史を辿る必要があるだろう。

(3) クーマ

ナーポリ湾の東端にあるミセーノ岬の北側の海沿いに、今日でもクーマという町がある。そもそもクーマは、イタリア最古のギリシア植民地で、ギリシア

人は「クーマエ」と呼んでいた。

有史以前に現在のクーマ近辺に住んでいたのは、東洋系地中海人であった。そこに、ピテコウサイ（現在のイスキア）島を占領していたギリシア人が、紀元前8世紀にエウボエア島のカルキスやエレクトリア等の町から渡ってきてここに植民地を建設し、ギリシア語で「クーマエ」と名付けたらしい。この町は紀元前7世紀から6世紀にかけて、カンピ・フレーグレイー帯の全域に勢力を伸ばしていった。クーマエのギリシア人の一部は南下してネアポリス（現在のナポリ）という植民地を造り、カンパーニアの沿岸全域にまで勢力を伸ばしていく。クーマエが近隣の海岸線をその支配下に収めた結果、内陸に住む先住民族達は、クーマエを経由しなければ商業交易もままならない事になり、結局クーマエは周辺の国々から嫉妬されることになり、紛争が起こるようになる。様々な先住植民地の住人達は、カプアのエトルリア人を先頭に、クーマエの勢力を抑えようとした。

紀元前524年の戦いでクーマエは滅びるはずであったが、暴君アリストデモーの戦術のお陰で、数の上では劣勢であったギリシア人の町クーマエの方が勝利し、かえって勢力を伸ばすことになる。エトルリア人は再度クーマエを破壊しようとするが、クーマエがシチーリアのシラクーサのジェローネに援軍を求めた結果、シチーリアの艦隊がクーマエに上陸したので、エトルリア人はまたもや敗戦する。クーマエは戦闘には勝っても、以後、内政問題を抱えることとなり、結局紀元前421年にはサムナイト人によって征服されてしまう。

大ギリシア圏 Magna Grecia の周辺地域では、ギリシア人对フェニキア人、エトルリア人、ローマ人等の紛争が続発するが、中でもローマは、南のカンパーニア地方を手中に収めるべく、その中枢部たるクーマエに注目して、これを攻略し、紀元前334年にはこれをローマの属領とする。

ローマの支配の下で、クーマエの周囲には、プテオーリ（現在のポツオーリ）やバイアエ（現在のバーイア）等の小村が生れ、前者はイタリア随一の重要な港として、後者は古代の最も重要な温泉地（テルメ）として繁栄していく。やがてクーマエは、ローマの地方自治体となるが、ローマの政治や経済との関係

## カンピ・フレーグレイの海 (加藤芳子)

が薄れていくにつれて、町は衰退していく。紀元4世紀から5世紀にかけてクーマエは、単に、キリスト教の最も重要な拠点であったにすぎない。やがて915年にサラセン人に侵略されると、この町は単に盗賊の倉庫と化し、ついに1207年にネアポリス人がクーマエの町を壊滅すると、クーマエは全くの廃墟と化す。

クーマエの原住民はそもそも、火山のクレーター跡の険しい山の上に家を建てて住んでいた。後から征服したギリシア人は、この山上に二つの神殿を建てた。一つは、クーマエの守護神アポロンの神殿、もう一つは、海からも見える最も高い所に、ユピテルの神殿である。ギリシア建築としてスタートしたアポロンの神殿は、アウグストゥス帝の時代に拡張され、紀元500年から600年にかけてキリスト教の会堂に改築され、洗礼場と埋葬場も増築された。ユピテルの神殿も、キリスト教の教会に改築されていることが、クーマエの最初のキリスト教徒の殉教者、聖マッシモの墓があることからわかっている。神殿がある山のふもとの平原には、ローマ時代の別荘が沢山立っていた。

神殿がある山のふもとには、古代からのトンネルがいくつも発見されている。一つは、古代ローマの詩人ウェルギリウスがその詩『アエネーイス』の中で語っている、「シビーラの洞窟」——長さ135メートル、高さ5メートルのドロモスである。これは、トロイ戦争の落ち武者エーネアに対して、アポロンの神殿の巫子シビーラが神託を授けた所として伝えられていたもので、1932年の発掘によってようやく発見された訳であるから、19世紀のロマン派詩人シェリーの時代には、まだ発見されてはいなかったものである。現在、トンネルの中には何も残ってはいないが、奥には、シビーラが宣託を授けていたとされる室がある。ここは、キリスト教の時代になってからも、古代イタリアで最も神聖な聖所の一つであった。

クーマエの住人達が岩に掘った洞窟の中に住んでいたという伝説にならって、ローマ人も、アウグストゥス帝の時代にクーマエの丘の下にいくつかの洞窟を掘った。オクタヴィアーヌス（後の皇帝アウグストゥス）の将軍アグリッパは、当時カンピ・フレーグレイー帯の港を脅かしていたポンペイウスの艦隊を牽制するために、建築家ルキウス・コッチェイウス・アウクトゥスに命じて、

クーマエの丘の下に、180メートルのトンネルを、そしてモンテ・グリーロの山の下には、クーマエの海とアヴェルノ湖とを結ぶトンネル、「平和の洞窟」を造らせた。この土木工事の結果、アヴェルノ火山の火口は水で満たされて湖となった。ナポリ湾の海とルークリーノ湖の間に第一の運河が造られ、次に、ルークリーノ湖とアヴェルノ湖の間にも第2の運河が造られた。こうして、海から2つの運河を通り、アヴェルノ湖にまで船が入れるようになり、ここに内湾の軍港が誕生し、周囲には倉庫や貯蔵所も建てられた。このアヴェルノ湖の水は、シビーラの洞窟と同様に、常に聖所としてみなされてきており、多数の画家が絵に描いてきている。こうして、モンテ・グリーロの山の地下には平和の洞窟があり、クーマエとアヴェルノ湖と海を結んでいるが、地上の山の上では、ヴィア・ドミツィアーノというローマ時代の道路が走っていて、と中にはアルコ・フェリーチェがあり、今日でも車が通っていて、クーマエからアヴェルノ湖を見おろしながら火口のふちを通り、ルークリーノまで出られる。

#### (4) ポツオーリ

クーマエの影響下にあった近隣の町には、現在のポツオーリがあった。ここは今でも、工場や倉庫が並び、船が行きかう港町である。

ポツオーリは、サモス島から渡ってきた古代ギリシアの政治上の追放者達が紀元前530年に造り、ディケアルキアと名付けた。ディケアルキアとは、ギリシア語で、正しい政府という意味である。もともとはクーマエの領地だったが、やがてサムナイト人に征服され、紀元前421年にはカンパーニアに征服される。しかし、紀元前338年にカンパーニアがローマ人に支配されるようになると、今度はプテオーリ（小さな井戸という意味）という名で、ローマの下で繁栄していく。プテオーリは、カンパーニアの首都カプアとギリシアや東方との交易に最良の場所にあり、政治・経済・軍事上、地中海で最も重要な港として発展していく。特に、ローマとフェニキア人の間のポエニ戦争の折には、貿易のみならず軍事上も重要な港としての役割を果たした。この港に陸揚げされた外国

## カンピ・フレーグレイの海（加藤芳子）

からの商品は、ヴィア・ドミツィアーノ街道をへて、遠くローマまで運ばれていった。

当時プテオーリでは、ガラス、テラコッタ、香水、織物、染料、鉄、などの産業が盛んであった。職人も、フェニキアやヘレニズムやエジプトの伝統を受けつぎ、優秀であった。文化的にもこの町は、様々な文明や宗教を受入れる、自由で活発な町であった。

しかし、皇帝ネロがローマ近くのオスティアに港を建設すると、プテオーリとローマの交易は減少し、近くのネアポリスとの関係の方が強くなっていく。そして、この地域一帯の地盤沈下のせいで、プテオーリの港の施設は海面下に没していき、やがてローマ帝国も衰退していくと、この港は、小さな漁村に変わり、中世の時代には、単に温泉客が訪れるのみとなっていた。1538年のモンテ・ヌオーヴォ山の噴火以後火山灰におおわれたこの町の復興は、スペイン総督トレドのドン・ペドロの援助によって推進されてきた。

カンピ・フレーグレイの中心部であるポツオーリの近くには、今でも休火山や死火山がある。アストローニという火山の名前は、沢山の鳥が棲息していたことに由来し、その火口のまわりは、トキワガシやクルミ、樅、榆、ポプラなどの木が繁茂している。この近くには、ソルファターラという休火山がある。この火山は、4000年も前に形成され、最後の噴火は1198年であるが、今だにガスや溶岩を噴出している。

古代の時代の栄華を示すように、今日ポツオーリには沢山の遺跡が残っているが、これらは、詩人シェリーが訪れた19世紀初頭には、発掘の真只中であり、シェリーは全く見ていなかったり、ほんの一部しか見れなかったものばかりである。

地元の住人が主に住んでいた港近辺の低い土地には、市場（マチェルム）があった。これは1750年に初めて発掘された時に、エジプトの女神セラピスの彫像が発見されたために、初めはセラピスの神殿と誤解されていたが、発掘が進むにつれて、ポンペイのよりも優れた市場であることが判明した。ここでは、近隣の田舎からとれた野菜や果物のみならず、東方や他の外国産の商品も売ら

れていた。この遺跡に残っている大理石の円柱は、地質学的にも重要な事実を物語っている。カンピ・フレーグレイー帯の火山活動による地殻変動の結果、紀元2世紀に建てられたこの市場の建物は、皇帝S.セヴェロとA.セヴェロによって再建された時でさえ、最初の床より2メートル高く新しい床が造られていることから、地盤沈下はゆっくりしたものであったことがわかっている。下降運動は11世紀末まで続くが、今度は地面は隆起しはじめ、やがて1538年のモンテ・ヌオーヴォ山の48時間にわたる噴火によって、この市場の建物はその火山灰の下に埋没してしまった。その後19世紀の初めまで変化は殆どなく、1750年になってこの建物から火山と海の沈澱物を除去する作業が始まった。作業は1820年まで進んだが、泥水がその妨げとなった。詩人シェリーは、この頃に、このマチェルムを見に来ているのである。

ローマの貴族達は、港の悪臭と騒音から遠く離れたソルファターラの山腹の贅沢な別荘に住み、怠惰な生活を送っていた。これらの別荘は、残念ながら、ヴァンダル人などの侵略や火山の溶岩、洪水や現代の山師などのために、残っているものは殆どない。貴族を喜ばせるために、ポツオーリには、二つの円形演技場と劇場と野外の大円形演技場が一つずつ造られていた。アンティニアーナ街道とドミツィアーノ街道が交差する所には、アウグストゥスの神殿が、その近くには、フラヴィアの円形演技場があり、今日ここでは、古代や現代の劇が上演されることもある。

ポツオーリから西に、ルークリーノ、更にバーイアにかけての海岸線には、海底に沈んだ遺跡があり、グラス・ボートに乗れば、船底のガラス越しに見えるし、空からとった航空写真を見れば、その壮大なスケールに圧倒されるほどである。これは、ポルトゥス・ユーリウスの遺跡なのである。

## (5) バーイア

ポルトゥス・ユーリウスは、ユーリウス・カエサルの名をとった港という事で、オクタヴィアーヌスとポンペイウスが争っていた紀元前37年に、オクタ



ヴィアーヌスの戦略家 M.V. アグリッパの命令で造られた。彼は、アヴェルヌス湖（現在のアヴェルノ湖）とルークリーノ湖と海とを、船が航行できる運河で結び、壮大な海軍基地ポルトゥス・ユーリウスを造り、ここをミセーヌム（現在のミセーノ）の大艦隊の造船所として使用した。地盤沈下のために、これらの壮大な遺跡は海中に沈したが、ポツオーリからバーイアにかけての海辺は、この遺跡で埋め尽くされているのである。そして、この町の遺跡の一部は、地上にも残っているのである。

バーイアという名称は、ギリシア人ユリシーズの仲間で舵手であった「パイオー」がここで亡くなって埋葬されたことにちなんで付けられたという説と、ローマ人が「小さな入江」という意味で付けたという説があるそうである。

カンピ・フレーグレイ一帯の古代の火山活動によって出来た火口は、海の浸蝕や地盤沈下の結果、わずかに残った部分が現在のバーイアの丘の部分である。

バーイアも、そもそもはポツオーリと同様に、近くのクーマエという古代ギリシアの植民地の港であった。ローマの時代にバーイアの町が享受した繁栄と富は、温暖な気候と、丘のふもとや海岸、海中から噴出する豊富な温泉のお陰であった。ローマの貴族や、貿易によって財をなした富裕な商人達は、バーイアの美しい景観と関節炎に効く温泉の恩恵に浴するために、このあたりに夏の別荘を建てた。共和制の晩年からローマ帝国の衰退期に至るまで、バーイアは、古代イタリアで最大の温泉保養地、即ちテルメだったのである。特に帝国の第1世紀には、ここは、クラソーやカエサル、ポンペイウス、キケロ、オルテンシオ、ヴァローネのみならず、アウグストゥスやネロのような皇帝さえも、別荘を構えていた、いわばローマの支配階層の生活の中心であった。そして今日でも、大温泉郷であることには変わりはないのである。

バーイアの古代ローマ時代のテルメの地上の遺跡は、海から見える丘の斜面にそって階段状にあり、ディアーナの神殿の温泉、メルクーリオの神殿の温泉、ウェヌス(ヴィーナス)の神殿の温泉、ソサンドラの温泉の4つに分れる。ローマのカラカラ浴場に似て、一つの町を形成しており、実に壮大である。これらの温泉は、丘の地形を利用したおびただしい階段と段丘で結びつけられている。

神殿と思われたのは間違いで、単に温泉の建物にすぎない。前三者は、丸天井のある円形の建物であった。テルメの中には、温泉あり、ブティックありと、普通の町と何ら変わらない。しかもこれらの建物が、バーイアの海を見下ろす丘の斜面を利用していくつもの階段状に町を形成し、縦の道路は、当然長い階段となっており、水平の道路と各所で交差している。この町は、その一部がこうして地上に残っているだけで、その大半は海中に沈んでいった。今、その海岸は、海水浴場として賜わっているが、小さなボートを雇えば、船上からでも見える遺跡を案内してくれるし、グラス・ボートでも見れる。水の透明度は、年々悪くなっているそうである。シェリーが詩に描いたバーイアの海底遺跡を、筆者は、ボートの上から、あるいは漁師に素もぐりで、あるいはグラス・ボートから、写真にとろうと何年も試みてきているが、いずれも映りが良くないので、拙著『英文学とイタリア — ペトラルカの伝統』(近代文芸社、1998年)の中に掲載した写真は、結局、現地で入手した航空写真となってしまった。海の青さにも透けて見える、壮大なスケールのポルトゥス・ユーリウスの海底遺跡を、是非御覧頂きたい。町並みも道路も、青い海に、全て白く透けて見えているのである。ナポリ湾一帯、西から東へと、ずうっと、古代の町が続いていた — そして、その大半が、今は海中に眠っているのである。

以上で、「バーイア」とは一体どこにあるのか。どんな所なのか。という二つの問題点は解決されたと思う。何故、シェリーは、バーイアをその詩の中に登場させることになったのか、という問題点だけが残った。これは、別の機会に譲ろうと思う。

### 参考文献

- T. Hutchinson (ed.): *The Complete Poetical Works of Percy Bysshe Shelley*.  
Oxford Univ. Press, 1965.
- Percy Bysshe Shelley: *Poesie*. A cura di Roberto Sanesi. Oscar Mondadori,  
1997.

カンピ・フレグレイの海 (加藤芳子)

Campania: Civilisation and Art. Treasures of Italy. Kina, Italia.

Campi Flegrei. Regione Campania. Azienda Autonoma di Cura Soggiorno e Turismo di Pozzuoli. 1998.

Campi Flegrei. Nuova Edizione. Giorgio Giubelli. Carcavallo editore, 1993.

Paolo Caputo et al.: Cuma. Roma: Bardi Editore, 1996.

Russo Vincenzo: Cuma. Pozzuoli: Tipografia D'Oriano.

加藤芳子 『英文学とイタリア — ペトラルカの伝統』 (近代文芸社, 1998 年).

加藤芳子 「イギリス・ロマン派の詩と地中海の考古学」 『近代英文学への招待』  
本田錦一郎編著 (北星堂書店, 1998 年).

加藤芳子 「シェリーがナポリ湾で見たもの」 日本英文学会北海道支部第 43 回  
大会口頭発表論文 (於 北海道大学, 1998 年).

加藤芳子 「イタリアに魅せられた作家達」 日本英文学会北海道支部主催第 39  
回英米文学講座講演 (於 北海道大学, 1997 年).